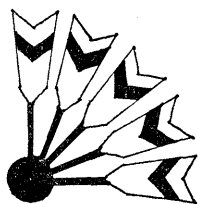


## 京の色彩



田中澄子

人に持ち味があるように、色にも自分があると思う。この場合の色とは、単なる好みではなく、生いたち、あるいは生活の中で育まれた人柄といえるものなのかもしれない。

一口に、自分の色というものの、一朝一夕に出来るものではなく、虚のない正味であらわれるだけに、まことに始末に困る。

色が人柄を象徴するように、言葉もその類に属すると思うが、言葉は本人が黙していればまだしも救いがある。しかし色の方は、裸で暮すわけにもいかないので、毎日が晴れがましいことこの上ない。

私などは、積年行きついた色に苦しめられもがいているが、三歳児でも、既に自分の色を持っているのには驚いた。

それというのも、私共の園に來ている子どもの大半が、京友禅と関係の深い家業の中で育っているからかもしれない。下絵やデザインを描く——これをもとに型紙を彫

る——糊に色を加えて元絵を活かす色合わせ——染め上げて着物に仕上げる——等等、複雑な工程から着物はうまれる。このような家内工業の仕事場が子どもの遊び場であり、道具が玩具であるから、子どもたちは、染色の感性をしらずしらずの中に会得し、色の感性をみがいているのだ。教育はこんなところで、もうはじまっているといえよう。

画壇の大御所、梅原龍三郎、安井曾太郎、両画伯の生家が、京染問屋であったと聞いたことがある。近年では、加山又造画伯の生家もまた、友禅の下絵を描いておられたとのこと、三つ子の魂百までの典型であるう。

いろいろな衣類の中でも、和服はとりわけ不思議な魅力を持つ。あの狭い布幅に、複雑な模様と多彩な色が、競いあうでもなく、互いの色の個性を生かしあって、調和を保っているのは、着物の特性といえよ

う。一つ間違えば使用にたえない危険と背  
中あわせの彩色の緊張が、かえって和服な  
らではの美を放つのではないだろうか。伝統  
の中で磨きあげた、日本人の感性の極みと  
でもいえよう。

京染業の経営者がこんなことをいった。

染の中で一番重要なのは、絵の見合わせ  
で、その専門の職人は、経営者よりも高給  
で遇するとの事。色の匙加減如何が多く  
生活にかかわるとあれば、もっともなこと  
だと納得がいく。職人が色をうみ出す一瞬  
は、理屈ぬきの神技的な感性が作動するに  
ちがいない。

こういった地域の特性がある故に、幼稚  
園での絵画指導は、むずかしく、かつ、手  
ごたえがある。保育者の好みの色を、一定  
の濃さに溶き、それに筆をつきさして、さ  
あ描きましようという訳にはいかない。子  
ども自身が好きな色をうみ出すのに手をか  
し、好みの濃さをつくり出すのを助けるの

が保育者の役割と心得る。描きたいと子ど  
もが願うものや事柄を、より自然に表わせ  
ると思つて、画用紙の色や大きさを選んだ  
つもりが、子どもたちの好みにあわず、用  
意し直さなければならぬこともある。

毎日が、新しい発見であり、驚きであ  
り、喜びである。

毎年秋、私どもの園では、絵画製作展を  
公開している。おこし下さる方は、色の豊  
かさ、美しい色彩、個性味、調和美など、  
作品の楽しさを御指摘下さるが、社交的辞  
令半分とみても、全く空々しい評価とは思  
えない。これも元を正せば、園の指導とい  
うよりも、園児の家庭環境に負うところが  
大きいと、常々思っている。

「環境」——そうだ。色は、環境をう  
み、育て、そして環境の中でうまれかわっ  
ていくものなのだ。

先年、中華人民共和国を訪れたが、初冬  
二週間の大陸の印象は、白茶けた土、紺色

の人民服、風になびく赤い旗、これだけ  
で、実に寒々したものだ。それにひき  
かえ日本では色があふれている。氾濫し  
ぎているともいえるが、色の乏しい国より  
も、色の豊かな国の方が、活気があつてい  
いと思つた。

多色な友禅染を着こなす日本人である。  
やがては豊かな調和のある、日本の色を、  
磨きあげていくに違いない。そして、新し  
い色を包む美しい環境を、育てるにちが  
ない。  
(京都・光明幼稚園)

\*

\*

\*